

「林知己夫著作ライブラリー」の開設

特徴と意義

〈共同執筆〉

統計数理研究所

大隅 昇

株式会社ビデオリサーチ

森本 栄一

このたび「小林和夫ライブラリー」を研修室に、また「林知己夫ライブラリー」を大会議室にそれぞれ開設いたしました。「小林和夫ライブラリー」は、故小林和夫氏がご生前にご自身で収集されてきた、国内外で出版のマーケティングおよびマーケティング・リサーチに関する貴重な蔵書をご提供いただいたものです。「林知己夫ライブラリー」には、故林知己夫先生がご生前に執筆された貴重な生原稿や関連資料等が収納されております。いずれも、お二人に近い方々から有効活用されることを願って当協会にご寄贈賜りました。当協会は、お二人に敬意を表すため、また両ライブラリーを業界関係者、研究者、学生等の方々に広くご利用いただくため、「マーケティング・リサーチャー」誌上で105号、106号の2号に連載し、これらの概要をご紹介します。

はじめに —ライブラリー開設とデータベース化の経緯—

このたび、日本マーケティング・リサーチ協会のご厚意により、故林知己夫先生の執筆・著作に関わる資料類を「林知己夫著作ライブラリー」として同協会内に開設していただくことになった(写真)。また、これら著作資料類の簡易データベースを作成し、これを協会会員はもとより広く開示したいと考え、整備を進めてきた。この誌面をお借りしてこれらについて簡単に紹介させていただく。

故林知己夫先生と日本マーケティング・リサーチ協会の関わりは深い。当協会の名誉会員(1985年)そして顧問(1986年から)を務められ、1999年からは参与(終身)として務められた。先生は数量化理論・数量化法の提唱者として国内外で広く知られるが、この分野に限らず、世論調査・社会調査・市場調査など、調査方法論の理論から実務まで幅広い活躍をされ、我々にとって有用な多くの実用的調査法の基礎を確立された。このほか、日本人の国民性研究、野生動物の生息数推定、医学データの分析など、その研究の範囲は多岐にわたる。こうした業績に対して紫綬褒章(1984年)、勲二等瑞宝章(1989年)、正四位叙勲(ご逝去後)を授けられた。今回開設の著作ライブラリーとそのデータベースは、こうした先生の研究成果

資料を閲覧可能な形として実現したものである(写真)。

実は、林先生は生前にご自分の著作一覧をメモとして記録されていた。またご逝去のあと、ご家族のご了解を得て、我々で書庫に保管されていた著作物のすべてを閲覧し、通し番号を付与して整理を行なった。この著作一覧メモを電子化し、その記録情報と著作物との照合作業を行い、同時にデータベース化を進めてきた。昨年末にこれらの資料保管とデータベースの完成の目途がついたことに合わせ、ここに公開のはこびとなった。

著作ライブラリーの概要

著作ライブラリーに収録の文献資料類は約2000点ある。先生の研究領域は多様であり、研究論文をはじめ著作書籍、新聞・雑誌記事、随想など、多岐にわたる。また、これらの資料類の検索の便を図るために前述の著作データベースを用意した。紙幅に限られるので、収録資料のうち本協会会員諸氏、本誌読者にとって関わりのある市場調査と調査方法論、それに数量化法分野でランドマークとなった主な著作とその登場の経緯の一端を紹介する。読者諸氏には機会があれば閲覧されることをお勧めする。



写真 「林知己夫著作ライブラリー」設置状況



写真 データベース起動初期画面

1. 市場調査・調査方法論との関わり

第二次世界大戦後、当時の連合国軍総司令部GHQ (General Headquarters)、民間情報教育局CIE (Civil Information & Education Section) は戦後の民主化政策遂行のため、日本語のローマ字化を検討したようであり、これに関連して「日本人の読み書き能力調査(1948年8月)が実施された。林先生はこの調査設計(標本抽出)・統計分析を担当、その後、1951年になって、この調査報告書の内容が書籍として刊行される(写真)。この調査の分析過程で、先生は読み書き能力得点の予測を目的に、現在、数量化 類として知られる予測手法を考案し、この書にもその分析結果が掲載されている。この調査は、実用的な標本抽出法の開発と取得データの分析手法が一体化した実用研究のあり方など、その後の社会調査・世論調査の基礎となる研究となった。とくに標本抽出法の基礎理論と実用的な調査法について、1951年に『サンプリング - 調査はどう行うか』(東京大学出版会)として刊行され、以後、こうした実務手法が日本国内における調査法の標準的な方式として広く普及する礎となるのである(写真)。

林先生と市場調査との関わりは密接で、そのきっかけの一つが新聞広告紙面の評価(閲読率の予測分析他)を目的として朝日新聞社広告局内に設けられたAOR研究会(Asahi Operations Research研究会)にある。AORでの実務研究を通じて、調査方法論と数量化法(外的基準のある予測型モデル、いわゆる数量化 類)が市場調

査の重要な分析方法として認められ、普及する。これらの一連の研究成果が、当時、朝日新聞広告局に在勤の村山孝喜氏との共著『市場調査の計画と実際』(1964年)として刊行された(写真)。この書はその後の市場調査分野に広く普及し、寄与しただけでなく、医学他の異分野における数量化理論の適用にも大きな役割を果たした。

また、本協会の企画として機関誌『マーケティング・リサーチャー』に「市場調査事始め」の記事が約8年間にわたり連載された。この最終回を林先生が担当され、調査におけるデータ収集のあり方の重要性、正確なデータがあってこそデータ解析の効用が期待できること、統計手法の果たす役割など、「調査の心構え」を語られている。結びの「市場調査事始めは終わっても」市場調査における「事始めは、まだ山のようにある」は、今でも示唆に富む言葉である。のちに協会創立15周年記念として執筆者(8名)による連載記事が合本され、1990年に刊行された(写真)。いずれの記事も当時の市場調査の状況を窺い知ることのできる貴重な情報であり、関係諸氏にとってはいまでも必見の資料である。

2. 数量化理論と市場調査分野への寄与

数量化理論・数量化法(数量化 類~IV類とV、VI類)は、林先生の独創的な研究成果の顕著な例である(注:ローマ数字の呼称は1964年に鮑戸弘氏の命名によるもので、当初、林先生自身は別の名称を使っていた)。これが初めて登場したのが、犯罪者の仮釈放と再犯予測